

《本号の表紙絵》

半井家の系図——古医書を語り継いできた人々

永観2年（984）に丹波康頼が円融上皇に献上した『医心方』は、全30巻が揃って今日まで伝えられている。その伝承には、御典医として丹波家とライバル関係にあった和気・半井家の功績が大である。和気・半井家の系図は異本が多くある。巻頭に掲げる系図は、薬商である京都半井家の手元にあったもので、かなり詳しい記載が見られる。現在は京都大学人文科学研究所が科学史研究室に寄託資料として保管している。

『医心方』半井家本は、周知の通り戦国時代に正親町天皇から典薬頭半井瑞策（名は光成、号は通仙軒）に下賜されたとされる。系図によると、明茂一明重一利長一明親一瑞策となるが、明重と利長は丹波重長の子供で、半井家の養子となった人物である。当時の両家の関係は、風通しがよかったと思われる。室町後期の医師達は、貴族や学僧と親しく交流し、『素問』『難経』『脈訣』の注釈書をはじめ元明の医書を研究する文化サークルを形成していた。江戸期に開花する日本近世医学の胎動をそこに窺うことができる。

現存の半井家本を見れば、下賜本のままではなく、巻22、25、28などの数巻に江戸期の書写テキストを含む。半井家は、他のテキストも保有しており、欠巻を補う努力を怠らなかった。第22巻については、流出後に岡本家、錦小路家、稲垣真郎の手を経て徳富蘇峰のコレクションに加わり、現在はお茶の水図書館成篁堂文庫に収められている。また、別系統のテキストとして、仁和寺本がある。巻1,5,7,9,10に加えて、近年に巻19（59葉）、前田尊経閣文庫に巻27の僚本が存在することが判明した。この鈔本は、和気明重の子である梅尾の心蓮院齋恰を介して仁和寺の所蔵に帰したものである（『大日本史料』第1編之21に引く『康頼と名鈔』による）。『医心方』の途切れることのない家伝継承に、和気・半井家のすぐれた文化認識を感じないわけにはいかない。

周知の通り、幕末に江戸医学館の多紀氏一門によって半井家から借り出された『医心方』は校刻される。当時は、『黄帝内経』『千金方』など古医書が続々と再発見されて復刻事業が立ち上がり、中国を遥かに凌ぐ緻密な文献考証の医書研究が行われた。臨床の場においても、漢方、蘭方や和方が折衷的に融和され、ハイブリッドな医療体系が醸成しつつあった。ところが、明治政府は、欧米一辺倒の極端な欧化政策を敢行し、蘭学、洋学の成果をも前近代としてバッサリ切り捨ててしまった。幕末の医師達が苦勞して蒐集した一群の古医書、それを読破して著述した労作は、医学研究の書架から取り除かれ、廃棄処分扱いとなる。その一部は明治期に訪れた中国人によって持ち出され、国外に流出してしまった。哀しむべきことに、医学的伝統を自ら断ち切ってしまったのである。その後遺症によって、日本独自の医道は、いまだに創り出せないでいる。その空白、断絶を埋めるべく立ち上がったのが「医史学」という学問である。

秘蔵され、読まれないままに放置されると、どんな名著でも永遠の生命を維持することができない。和気・半井家のように、原著者の後を継いで後世に伝えていく役割も重要である。古医書に投影された昔人の「知恵」を未来に向けて語り継ぐこと、それも医史学の重要なミッションであるように思われる。

（武田 時昌）